

スクールカースト特性尺度の作成と学級内地位との関連の検討

How the Trait of School Caste Related to the Status in Classroom?

貴 島 侑 哉

中 村 俊 哉

笹 山 郁 生

Yuya KIJIMA

Shunya NAKAMURA

Ikuo SASAYAMA

(福岡教育大学教育学研究科)

(福岡教育大学教育学部)

(福岡教育大学教育学部)

(平成28年9月30日受理)

本研究では、グループ間序列であるスクールカーストと個人の学級内地位との関連を検討するために、大学生191名を対象に、①コミュニケーションスキル尺度、②スクールカーストにおけるグループ特性を測定するスクールカースト特性尺度、③先行研究で用いられてきたスクールカーストに関する代理指標、④個人の学級内地位についての項目から構成された質問紙調査を実施した。その結果、スクールカースト特性尺度は、「学級リーダー因子」「ツッパリ因子」「社交性因子」「非ヲタク因子」の4因子構造であること、スクールカーストにおけるグループ特性として社交性因子が高いほど個人の学級内での地位が高くなることが示された。グループの持つ特性がスクールカーストを決定し、どのようなグループに所属するかということによって、個人の学級内地位も規定されている可能性について考察した。

問題

学級集団における人間関係には階層がある。古典的な学級集団の研究では、学級内の友人関係が発展していくと、最初は相互に平等で水平的な関係が発展し、その後、垂直的な階層をなしていくことが確認されている。長島(1967)は小学生を対象にソシオメトリック・テストを実施し、社会的地位の階層化の過程を検討し、高学年になるにつれて階層化が進んでいることを明らかにしている。

これまで、学級集団における児童・生徒の社会的地位と関係のある要因は、性格・行動特性であるとされてきた。たとえば、上田(1979)は小学生を対象に「友達に好かれる子」の条件を調べた結果、「人を馬鹿にしたり、悪口を言ったりしない子ども」「協力する子ども」たちの社会的地位が高いことを明らかにしている。田崎(1982)も、学級内で勢力を所有する児童は、「よく相談に乗ってくれる」といった親和性の特性を持っていることを指摘している。古典的な学級集団の勢力関係についての研究は、このように児童・生徒一人ひとりの学級内での社会的地位を規定付けるものに焦点が当てられ、研究が行われてきてい

た。つまり、学級内における個人の地位の階層についての検討に留まっており、学級内における特に仲の良い児童・生徒同士で構成されているグループ間の関係については考慮されていなかったのである。

近年はこの学級内におけるグループに焦点が当てられ検討されてきている。それらによると、以前に比べて、学級内におけるグループは分断されてきているとされている。例えば、宮台(1994)は、今日の高校生・中学生・小学生において、教室の中での共同性は失われつつあるとしており、教室内在グループに分かれ、グループ間でコミュニケーションが希薄になってきているとしている。また、本田(2011)の質問紙調査でも、「一緒に行動する友達は決まっている」という項目に対して、中学生の全体の8割が決まっていると回答していた。しかし、本田(2011)は、「いつも一緒に友達グループ以外の人とは、特に仲良くしたいとは思わない」という項目については否定的な回答が6割を超えたことから、グループ間はまったく互いに閉鎖的で交流のない世界がバラバラに並存しているわけではないとした。

さらに、このグループ間には何らかの力関係が

働き、ヒエラルキーを成していることが指摘されている。上間（2002）は、女子高校において、学級内はグループに分かれており、グループ間はヒエラルキー的な秩序をなしていたと指摘している。鈴木（2012）においても、学級内地位についてのインタビューで、同学年の児童生徒に地位の差がないと答えた学生は見られなかったことから学級内には序列があることが示唆された。古典的な学級集団の研究が行われていた時代には指摘されていなかったグループ間の階層が近年の学級集団には見られてきたのである。この学級内におけるグループ間のヒエラルキーはスクールカーストと呼ばれ、研究が進められている（鈴木（2012）、水野（2015）など）。

スクールカーストにおける上位グループや下位グループにはそれぞれ特徴が見られることが指摘されている。鈴木（2012）が行ったインタビュー調査によると、スクールカーストの上位グループに所属する児童・生徒は、にぎやか・異性にもてる・若者文化へのコミットメントが高いといった特徴が挙げられ、下位グループに所属する児童・生徒は、地味で特徴がないといった特徴が挙げられた。

さらに、上下関係のあるスクールカーストは児童・生徒の学校適応感に大きく影響を与えている。鈴木（2012）は質問紙調査とインタビュー調査を行うことで、スクールカースト上位のグループほどクラスに影響力を持っているため、下位グループは上位グループに恐怖心を抱きながら学校生活を過ごしていることを明らかにしている。

また、スクールカーストは、近年の学校問題にも大きく関係しているとされている。森口（2007）は、スクールカースト上位の子どもほどグループ間を容易に移動できるので、いじめの標的になりにくく、結果的にスクールカーストの高いグループ内ではいじめは発生しにくくなると述べており、スクールカーストはいじめを読み解くための新たな思考枠組みとして認識すべきとしている。和田（2013）は、学級内における地位の低さを原因としたいじめの申告をすることは、自尊心を著しく傷つける行為であり、誰にも相談できない状況が出来上がることでいじめ問題が深刻化していくとしている。

このようなことから、今日の学校問題に取り組む上でスクールカーストのメカニズムを解明していくことは、意義深い。

ところで、スクールカーストの定義は、先行研究によって異なっている。たとえば、森口（2007）

は、スクールカーストとは人気やモテるか否かを決定要因としたクラス内のステイタスであり、その上で最大の決定要因は「自己主張力」「共感力」「同調力」の三次元で構成されたコミュニケーション能力であると定義している。

また、鈴木（2012）は、スクールカーストを測定する代理指標として「私はクラスで人気者だ」という項目を用いることで、調査協力者を分類し、学級内地位上位と下位の特徴について考察している。

しかし、水野（2015）は人気度だけでは、集団間の序列であるスクールカーストを考慮できていないと問題点を指摘している。水野（2015）は、「私はクラスで人気者だ（人気度）」と「私のいるグループはクラスで中心的なグループだ（中心度）」という二つの指標を用いることで、個人とグループの違いをより明確にして検討を行っている。すると、人気度は学校適応感に影響を与えるが、中心度は学校適応感に影響を与えないということが示された。つまり、学校適応感はスクールカーストから影響を受けないが、個人の学級内地位から影響を受けるということが示されたのである。このことは、個人の学級内地位と所属グループの地位は必ずしも一致しないことを示唆している。よって、新しい概念であるスクールカーストの特徴を考察するにあたり、個人の学級内地位とスクールカーストを別のものとして捉え、その違いについて検討する必要があるだろう。そうすることで、古典的な学級集団の研究では見られなかったグループ間序列の独自性が見えてくることが考えられる。

以上のことより、本研究では、スクールカーストを「学級内において所属しているグループに基づく地位及び序列」、学級内地位を「学級内における主観的な個人の地位及び序列」と定義し、これらの関係性について検討することによって、古典的な学級集団の研究では指摘されてこなかったグループ間序列であるスクールカーストの特徴を明らかにしていくことを目的とする。

ところで、スクールカーストの測定方法については、効果的な測定法として、確立されたものは見られない。水野（2015）が用いた「私のいるグループはクラスで中心的なグループだ（中心度）」という項目も、所属グループの学級内での地位を包括的に尋ねる項目であるが、どのような要因がスクールカーストを規定しているのかを検討することはできない。さらに、直接的に尋ねる1項目でスクールカーストを測定しているため、社会的

望ましさの影響を受けることが考えられるため、十分な測定項目とは言えない。

そこで、本研究では、スクールカーストにおいて、上位や下位グループを規定付けると考えられるグループの特性に注目し、スクールカーストを測定することとする。鈴木（2012）は、スクールカーストの上位グループと下位グループの違いについて検討を行っている。それによると、上位グループは下位グループに比べて自己主張ができる、上位グループの方が下位グループに比べて恋人のいる人が多いといった特徴があることを見出している。このことから、上位グループと下位グループを規定付ける特性があることが窺える。したがって、本研究では、まずグループ間の上位下位を隔てる特性に焦点を当てたスクールカースト特性尺度を作成することとする。

また、学校種によってスクールカーストの捉えられ方は異なり、学校段階が上がるにつれて、グループ間での序列化が顕著になるということも指摘されている。鈴木（2012）は、スクールカーストについてのインタビューを行い、学校種別のスクールカーストの様相を明らかにした。これによると、小学校では、嫌われている児童が、「地位」の低い児童、皆で遊ぶ遊びがうまい児童が、「地位」の高い児童と捉えられている傾向があることに對し、中学・高校では、個々の生徒が何らかのグループに所属し、それぞれのグループに名前を付けて、グループ間で地位の差を把握している傾向があった（上位から「ギャル系」「キャピ系」「普通」「地味」「オタク」等）というものであった。このことから、小学校では、グループ間序列としてのスクールカーストは顕著ではなく、中学・高校と校種が上がるにつれて顕著となることが示唆された。したがって、本研究においては、スクールカーストが顕著になってくる中学・高校に焦点をあてて検討することとする。

<予備調査>

目的

予備調査の目的は、スクールカーストにおける上位グループ・下位グループの特徴を収集し、スクールカースト特性尺度原案を作成することである。

方法

調査対象者 大学生及び大学院生 152 名（男性 61 名、女性 91 名、平均年齢 20.01 歳、 $SD = 1.43$ ）。

調査時期 2015 年 8 月上旬。

質問紙構成

- ① 中学校・高校時代を想起してもらい、学級内のグループ間に優劣があったかを 3 つの選択肢（はい／あったかもしれない／いいえ）から 1 つ回答を求めた。
- ② ①で（はい／あったかもしれない）と回答した対象者に対して自身の地位についての自覚の程度を 5 件法（5：自覚あり～1：自覚なし）で回答を求めた。
- ③ ①で（はい／あったかもしれない）と回答した対象者に対して、学級内地位の高かったと思われるグループ・低かったと思われるグループそれぞれの特徴を自由記述式で回答を求めた。

結果

学級内におけるグループ間に優劣関係があった・あったかもしれないと回答したのは、129 名（84.8%）であった。また、理論的中点が 3 である自覚の程度の平均は 3.92、標準偏差は 0.85 であった。このことから、ほとんどの学生が学級集団におけるグループ間に何らかの力関係があることを認知しており、自身の地位認知も行えていたことが示唆された。

また、予備調査の結果、「運動ができる人が多い人が多かった。」「ツイッターによく書き込みをする人が多い人が多かった。」といった学級内地位上位の特徴に関する記述が 346 得られ、「休み時間も一人で勉強している人が多い人が多かった。」「学校行事に興味の無さそうな人が多い人が多かった。」といった学級内地位下位の特徴に関する記述が 298 得られた。これらの記述を KJ 法によって、「運動」「自己主張」といった 49 のカテゴリに分類した。その後、カテゴリを代表する記述から、105 項目を作成し、スクールカースト特性尺度原案とした。

<本調査>

目的

本調査の目的は、グループの地位を規定付けるグループ特性について測定するスクールカースト特性尺度を作成し、その内的整合性と基準関連妥当性を検討し、個人の学級内地位との差異について検討することである。

方法

調査対象者 大学生 191 名（男性 101 名、女性 90 名、平均年齢 18.97 歳、 $SD = 0.87$ ）。

調査時期 2015 年 11 月上旬。

手続き 調査は質問紙を用い、講義中に一斉に行った。調査は中学校 1 年生～高校 3 年生までで、自身が学級内の最も決まった仲間と行動して

いた時期を想起してもらい回答を求めた。

質問紙構成

①スクールカースト特性尺度の基準関連妥当性を検討するために、藤本・大坊(2007)が作成したコミュニケーションスキルを測定するENDCOREs尺度の中でも対人スキルと位置付けられた「自己主張」「他者受容」「関係調整」の3因子12項目について、7件法(7:かなり得意～1:かなり苦手)で回答を求めた。

②スクールカースト特性尺度原案105項目(項目例:「私の所属していたグループの友人の多くは運動が好きであった。」「私の所属していたグループの友人の多くは、制服を着崩して着ていた。」)について、5件法(5:あてはまる～1:あてはまらない)で回答を求めた。

③鈴木(2012)や水野ら(2015)がスクールカーストの代理指標として用いた「私はクラスで人気者であった」・「私の所属していた友達グループはクラスの中心だった」という項目について4件法(4:あてはまる～1:あてはまらない)で回答を求めた。

④自身の学級内地位について5件法(5:上位～1:下位)で回答を求めた。

結果

スクールカースト特性尺度の作成

スクールカースト特性尺度原案105項目について項目分析を行い、天井効果(平均+1SD>5の項目)・床効果(平均-1SD<1の項目)が見られた16項目を削除し、89項目に関して因子分析(最尤法・Promax回転)を行った。その際、予備調査において、スクールカースト下位の特徴として挙げられた項目については、逆転処理を行った。因子分析の結果から、共通性が.160以下である項目13項目を削除し、スクールカースト特性尺度原案76項目に関して再度、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。スクリープロットの減衰状態及び因子の解釈可能性から因子数を4に決定した。因子負荷量の絶対値.450以上を基準に項目を減らすとともに、2つの因子に高い負荷量を示した項目も減らし、52項目をスクールカースト特性尺度($\alpha = .930$)とした。

第1因子($\alpha = .934$)は「クラスの中心で学級を動かしていた」「クラスでまとめ役となるが多かった」といった15項目が高い因子負荷量を示したため、「学級リーダー」因子と命名した。第2因子($\alpha = .889$)は「教師に対して反抗的な態度」「都合が悪くなるとすぐに文句を言った」といった18項目が高い因子負荷量を示したた

め「ツッパリ」因子と命名した。第3因子($\alpha = .893$)は「多くの人と関わるのが好き」「コミュニケーション能力が高かった」といった14項目が高い因子負荷量を示したため、「社交性」因子と命名した。第4因子($\alpha = .735$)は、「読書が好きな人が多かった」「アニメが好きな人が多かった」といった5つの逆転項目が高い因子負荷量を示したため、「非ヲタク」因子と命名した。結果をTable1に示す。

スクールカースト特性尺度の基準関連妥当性の検討

スクールカースト特性尺度の基準関連妥当性を検討するために、ENDCOREs・代理指標との相関分析を行った。

まず、コミュニケーションスキル尺度であるENDCOREs尺度の下位因子の内的整合性を確認した。その際、他者受容に関する項目1項目がタイプミスにより、意味の異なる項目となってしまっていたため、他者受容因子については3項目からなる因子として本研究では取り扱った。その結果、自己主張因子($\alpha = .756$)、他者受容因子($\alpha = .757$)、関係調整因子($\alpha = .752$)のいずれも最低限の信頼性は認められた。

さらに、ENDCOREs尺度の項目は回答者が社会的に望ましいとされる回答をすることが懸念されたため、基本統計量及び分布を確認した。すると、多少分布の頂点が高い方へ傾いていたものの、概ね正規分布の形が見られた。よって、それぞれの因子の合成得点を用いて、以下の分析を行うこととした。基本統計量やデータの分布に関しては、Table2に示す。

次に、人気度・中心度・学級内地位の基本統計量及び分布の確認を行った。「私は人気者であった(人気度)」「私の所属したグループはクラスでも中心のグループであった(中心度)」という2項目について4件法(4:あてはまる～1:あてはまらない)、「あなたの学級内地位(スクールカースト)であると考えられるもの一つを回答してください(学級内地位)」という1項目について5件法(5:上位～1:下位)で回答を求めたが、これらは自己呈示の影響を受けやすい項目であったため、これらの分布の確認を行った。すると、学級内地位の項目に関して、分布の頂点が得点の高い方へ傾いている傾向が見られ、「1:下位」と回答した協力者が3.5%しかいなかった。したがって、この項目については、「1:下位」、「2:中位よりも下位」と回答した回答者をまとめて「下位」とする4件法とみなしたものを修正後

Table1 因子分析（最尤法・Promax 回転）により作成されたスクールカースト特性尺度

	因子			
	1	2	3	4
38. 私の所属していたグループは学級でリーダーとなることが多かった。	.966	-.099	-.164	-.018
13. 私の所属していたグループが中心となって学級を動かしていたと思う。	.962	.011	-.200	.033
12. 私の所属していたグループはクラスでまとめ役となることが多かった。	.905	-.023	-.084	.004
40. 学級内では、授業内外にかかわらず、私の所属していたグループの友人の発言が多かった。	.840	.059	-.065	.085
92. 私の所属していたグループは学級会など企画することが多かった。	.827	-.053	-.129	-.049
88. 私の所属していたグループは、クラスの雰囲気に影響を与えていたと思う。	.684	.099	.101	.058
22. 私の所属していたグループの発言は、クラスに影響を与えた。	.661	.103	.087	-.026
97. 私の所属していたグループがクラスのムードメーカーになることが多かった。	.584	.143	.202	.064
49. 私の所属していたグループはクラスを盛り上げるのが上手だった。	.553	.139	.274	.046
14. 私の所属していたグループは、声が大きい友人が多かった。	.532	.325	.171	-.040
37. 私の所属していたグループは運動が得意な人が多かった。	.512	-.040	.034	.118
96. 私の所属していたグループの友人はクラスで意見を言うことが少なかった。※	.485	-.267	.035	.251
83. 私の所属していたグループの友人が持つ趣味は大勢が趣味としているようなものであった。	.465	.007	-.019	-.060
11. 私の所属していたグループは勉強や運動で目立つ場面があった。	.457	-.218	.186	.030
78. 私の所属していたグループは、学校行事に積極的だった。	.450	-.158	.288	-.154
67. 私の所属していたグループの友人は、都合が悪いとすぐに文句を言う傾向があった。	.027	.684	-.027	.011
1. 私の所属していたグループは、教師に対して反抗的な態度をとる友人が多かった。	.008	.652	-.051	.002
47. 私の所属していたグループの友人の多くは、まじめだった。※	-.054	.626	-.129	.336
32. 私の所属していたグループの友人は校則をきちんと守っていた。※	-.209	.619	-.067	.266
62. 私の所属していたグループの友人は先生に敬語を使わないことがあった。	.097	.578	-.199	-.008
45. 私の所属していたグループの友人の多くは制服を着崩していた。	.050	.569	-.004	.061
71. 私の所属していたグループの友人の口調は攻撃的なときもあった。	.006	.566	.062	-.218
86. 私の所属していたグループの友人は勉強ができない人が多かった。	.020	.554	.198	.056
26. 私の所属していたグループでは、よく誰かの陰口をいうことがあった。	-.049	.551	-.186	.087
101. 私の所属していたグループの友人は怒ると怖い印象を持たれていた。	-.038	.545	.080	-.122
89. 私の所属していたグループには少し意地悪な子もいた。	.110	.531	-.162	-.028
93. 私の所属していたグループの友人は遅刻が目立った。	.032	.530	-.043	-.150
94. 私の所属していたグループの友人の多くは、感情を表に出すことが多かった。	.118	.517	.037	-.086
3. 私の所属していたグループの友人の多くは、自分の考えを曲げるのを嫌がった。	-.206	.513	.095	-.146
18. 私の所属していたグループでは、派手なことをするのが好きだった。	.332	.487	.190	.001
79. 私の所属していたグループの友人は喧嘩が強い人が多かった。	.241	.486	.039	.062
73. 私の所属していたグループの友人の多くは、気が強かった。	.117	.480	.169	-.115
54. 私の所属していたグループの友人の多くは、成績が良かった。	-.261	.475	-.059	.266
4. 私の所属していたグループの友人の多くは、多くの人と関わるのが好きであった。	.069	-.110	.692	.006
75. 私の所属していたグループは、グループ内外関わらず仲が良かった。	.147	-.270	.668	-.165
76. 私の所属していたグループの友人の多くは、少しおどおどしていた。※	-.311	-.167	.642	.158
104. 私の所属していたグループの友人の多くは、堂々としていた。	.102	.050	.608	-.021
66. 私の所属していたグループの友人の多くは、社交的であった。	.243	-.141	.588	-.034
10. 私の所属していたグループのメンバーの多くはコミュニケーション能力が高かったと思う。	.183	-.005	.572	.186
90. 私の所属していたグループの友人は静かな方だった。※	.022	.230	.564	.197
81. 私の所属していたグループの友人は地味な人が多かった。※	-.038	.028	.560	.374
17. 私の所属していたグループは、グループ内外関わらず、誰とでもしゃべっていた。	.141	-.306	.555	-.029
44. 私の所属していたグループの友人の多くはおしゃべりだった。	.016	.258	.538	-.081
21. 私の所属していたグループはクラスであまり目立たなかった。※	.184	-.004	.531	.206
16. 私の所属していたグループの友人は派手な人とあまり仲良くなかった。※	-.105	.100	.524	.175
100. 私の所属していたグループの友人は一人一人がしっかり自分の考えを持っていた。※	-.107	-.105	.511	-.246
55. 私の所属していたグループの友人の多くは、自信がなかった。※	-.064	-.135	.505	.199
70. 私の所属していたグループの友人は読書が好きな人が多かった。※	-.022	.039	.156	.690
69. 私の所属していたグループの友人の多くはアニメが好きな人が多かった。※	-.126	-.064	.170	.664
105. 私の所属していたグループの友人は、インターネットが好きな人が多かった。※	.178	-.240	-.174	.613
80. 私の所属していたグループの友人はひとりの時間を大切にしていた。※	.144	-.022	-.108	.491
72. 私の所属していたグループの友人の多くは絵を描くことが得意だった。※	-.021	-.004	.082	.473
※逆転させた後に因子分析を行った項目				
	因子間相関	2	3	4
	1	.290	.645	.285
	2		.169	.098
	3			.388

Table2 ENDCOREs 下位因子得点の基本統計量
及び分布

	M	SD	データの分布						
			1.0~1.50	1.51~2.50	2.51~3.50	3.51~4.50	4.51~5.50	5.51~6.50	6.51~7.0
自己主張	4.56	1.01	2(1.0%)	5(2.6%)	22(11.5%)	68(35.6%)	69(36.1%)	23(12.0%)	2(1.0%)
他者受容	5.36	0.85	0(0.0%)	1(0.5%)	3(1.6%)	27(14.1%)	75(39.3%)	70(36.6%)	15(7.9%)
関係調整	4.86	1.00	10(5.5%)	3(1.6%)	14(7.3%)	52(27.2%)	78(40.8%)	40(20.9%)	3(1.6%)

Table3 人気度・中心度・学級内地位の基本統計量
及び分布

	M	SD	データの分布				
			1	2	3	4	5
人気度	2.60	0.80	19(9.9%)	58(30.4%)	94(49.2%)	20(10.5%)	—
中心度	2.74	0.97	31(16.2%)	57(29.8%)	66(34.6%)	37(19.4%)	—
学級内地位	3.51	0.94	7(3.7%)	13(6.8%)	75(39.3%)	68(35.6%)	28(14.7%)
修正後学級内地位	2.52	0.88	20(10.5%)	75(39.3%)	68(35.6%)	28(14.7%)	—

Table4 スクールカースト特性尺度の基準関連
妥当性の検討

	自己主張	他者受容	関係調整	学級内地位	人気度	中心度
学級リーダー	.114	.105	.083	.500 **	.550 **	.789 **
ツッパリ	.026	-.134	-.075	.231 **	.329 **	.308 **
社交性	.006	.194 **	.198 **	.391 **	.306 **	.563 **
非ヲタク	-.108	.029	-.033	.175	.025	.354 **
尺度得点	.051	.053	.062	.488 **	.506 **	.738 **

** . $p < .01$

学級内地位として、以下の分析で用いることとした。結果を Table3 に示す。

さらに、ENDCOREs 尺度の下位因子の合成得点及び人気度・中心度・学級内地位の項目得点とスクールカースト特性尺度の下位因子の合成得点との相関分析を行い、基準関連妥当性を検討した。すると、学級リーダー因子は、学級内地位 ($r = .500$)・人気度 ($r = .550$) と強い相関が見られ、中心度 ($r = .789$) と非常に強い相関を示した。ツッパリ因子は、学級内地位 ($r = .231$) と弱い相関が見られ、人気度 ($r = .329$)・中心度 ($r = .308$) と中程度の相関が見られた。社交性因子は、他者受容因子 ($r = .194$)・関係調整因子 ($r = .198$) との間に弱い相関が見られ、学級内地位 ($r = .391$)・人気度 ($r = .306$) との間に中程度の相関、中心度 ($r = .563$) との間に強い相関が見られた。非ヲタク因子は、中心度 ($r = .354$) と中程度の相関が見られた。下位因子の合成得点であるスクールカースト特性尺度は、学級内地位 ($r = .488$)・人気度 ($r = .506$) との間に強い相関が見られ、中心度 ($r = .738$) との間に非常に強い相関が見られた。結果を Table4 に示す。

以上の結果から、コミュニケーションスキル尺度である ENDCOREs 尺度と相関はほとんど見られなかったが、人気度・中心度・学級内地位と高い相関が見られたため、スクールカースト特性尺度の基準関連妥当性は認められた。

学級内地位とスクールカースト特性の関係性の検討

次に個人の学級内地位とスクールカーストにおけるグループ特性との関係性を検討するために、修正後学級内地位を独立変数、スクールカースト特性尺度の各因子の合成得点を従属変数として、それぞれについて 1 要因分散分析を行なった。その結果、学級リーダー ($F(3, 187) = 21.30, p < .001$)、ツッパリ ($F(3, 187) = 3.57, p < .05$)、社交性 ($F(3, 187) = 11.83, p < .001$)、非ヲタク ($F(3, 187) = 3.85, p < .05$)、スクールカースト特性尺度 (すべての項目の合計得点) ($F(3, 187) = 19.64, p < .001$) の主効果が有意であった。そこで、それぞれについて Ryan 法による多重比較を行なった (Figure1: 合成得点を各因子の項目数で除した平均値を示した)。

すると、個人の学級内地位によって、非ヲタク因子以外の因子は差が見られた。学級リーダー因子は上位群が中位群上位、中位群、下位群よりも大きく、中位群上位が中位群、下位群よりも大きかった。ツッパリ因子は、上位群が下位群よりも大きかった。社交性因子及びスクールカースト特性尺度は上位群が中位群上位、中位群、下位群よりも大きく、中位群上位が中位群、下位群よりも大きく、中位群が下位群よりも大きいことが示された。非ヲタク因子は分散分析での主効果は有意だったが、多重比較では、いずれの群間でも差は見られなかった (Table5)。

これらの結果から、所属していたグループの特性と個人の学級内地位との関連が示された。所属していたグループが学級でリーダーシップをとったり、多くの人と交流することが好きだったりするようなグループであることは、個人の学級内での地位と大きく関連があることが示唆された。これに対して、所属していたグループがツッパっていたり、ヲタクが多かったりするようなグループであることは個人の学級内地位とあまり関連がないことが示された。

スクールカースト特性尺度によるクラスター分析

調査協力者の所属していたグループの特徴を探るために、スクールカースト特性尺度の下位因子の合成得点を用いて、K-means 法によるクラスター分析を行った。その結果、人数の偏りが少なかったことから 4 つのクラスターに分類した (Figure2: 合成得点を各因子の項目数で除した平均値を示した)。

次に、各クラスターの特徴を分析するために、所属クラスターを独立変数、スクールカースト特

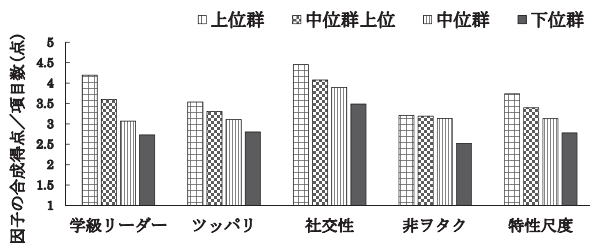


Figure1 学級内地位ごとのスクールカースト特性尺度の合成得点

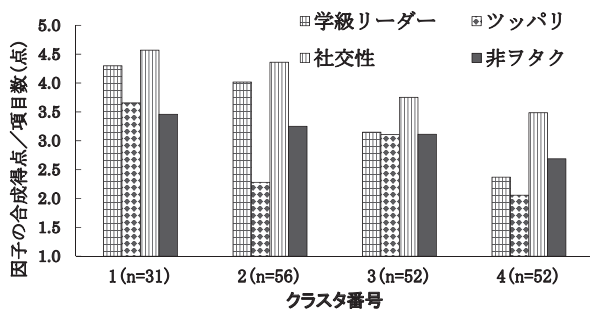


Figure2 各クラスターの特徴

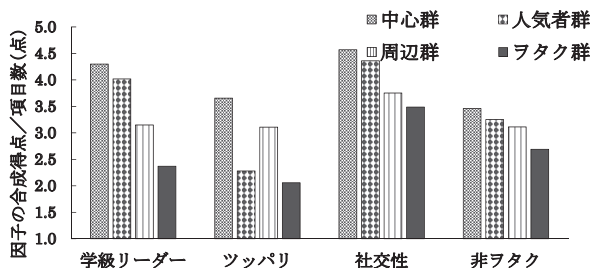


Figure3 各クラスターの因子の合成得点の比較

性尺度の下位因子の合成得点を従属変数とした1要因分散分析を行なった。その結果、学級リーダー ($F(3, 187) = 141.36, p < .001$), ツッパリ ($F(3, 187) = 123.61, p < .001$), 社交性 ($F(3, 187) = 46.27, p < .001$), 非ヲタク ($F(3, 187) = 6.71, p < .001$) の合成得点の主効果が有意であった。そこで、それぞれについてRyan法による多重比較を行った (Figure3: 合成得点を各因子の項目数で除した平均値を示した)。

以上の結果より、各クラスターを命名した。クラスター1は、全ての因子の合成得点が高かったことから、中心群と命名した。クラスター2は、社交性因子の合成得点が高く、ツッパリ因子の合成得点が低かったことから、人気者群と命名した。クラスター3は特出して低い因子の合成得点はなかったが、学級でリーダーになれるわけでもなく、社交的であるわけでもないということから周辺群と命名した。クラスター4は非ヲタク因子

Table5 学級内地位についてのRyan法による多重比較結果

従属変数	Ryan法による多重比較の結果
学級リーダー	上位群 > 中位群上位 > 中位群・下位群
ツッパリ	上位群 > 下位群
社交性	上位群 > 中位群上位 > 中位群 > 下位群
非ヲタク	n.s.
特性尺度	上位群 > 中位群上位 > 中位群 > 下位群

Table6 各クラスターについてのRyan法による多重比較の結果

従属変数	Ryan法による多重比較の結果
学級リーダー	中心群 > 人気者群 > 周辺群 > ヲタク群
ツッパリ	中心群 > 周辺群 > 人気者群 > ヲタク群
社交性	中心群・人気者群 > 周辺群 > ヲタク群
非ヲタク	中心群・人気者群・周辺群 > ヲタク群

の合成得点が顕著に低かったことから、ヲタク群と命名した (Table6)。

学級内地位とグループ特徴の関係の検討

学級内地位を行、各クラスターを列として 4×4 のクロス集計表を作成した (Table7)。このクロス集計表について、カイ2乗検定を行ったところ、所属していたグループの特徴と個人の学級内地位には関連があることが示された ($\chi^2(9) = 51.46, p < .001$)。そこで、残差分析を行ない、標準化された残差を算出した。中心グループに所属していた学生は、自身の地位を「上位」と認知していた傾向が非常に高く、「中位」・「下位」と認知していた傾向が低いことが示された。人気者グループに所属していた学生は、自身の地位を「上位」・「中位よりも上」と認知していた傾向が高く、「中位」と認知していた傾向が低いことが示された。なお、中心グループに所属していた学生よりも、人気者グループに所属していた学生の方が、自身の地位を「上位」と認知している傾向は小さかった。周辺群に所属していた学生は、個人の地位を「上位」と認知していた傾向が低く、「中位」と認知していた傾向が高いことが示された。ヲタクグループに所属していたとする学生は、自身の地位を「上位」「中位よりも上」と認知していた傾向が低く、「中位」「下位」と認知していた傾向が高いことが示された。

以上の結果から、個人の学級内地位に最も大きな影響を与えるグループの特性が明らかになった。社交性因子の合成得点が高かった中心グループや人気者グループに所属していた学生は、個人の学級内地位を「中位よりも上」以上であると認知していた傾向が見られた。よって、個人の地位

Table7 学級内地位とグループの特徴との関係

		上位	中上位	中位	下位	合計
中心	度数	11	13	6	1	31
	割合 (%)	35.5	41.9	19.4	3.2	100
	残差	3.6 **	0.9	-2.5 *	-1.6	
人気	度数	12	26	13	5	56
	割合 (%)	21.4	46.4	23.2	8.9	100
	残差	1.7 †	2.2 *	-2.9 **	-0.7	
周辺	度数	4	19	26	3	52
	割合 (%)	7.7	36.5	50.0	5.7	100
	残差	-1.7 †	0.4	1.9 †	1.5	
ヲ ク	度数	1	8	30	13	52
	割合 (%)	1.9	15.4	57.7	25	100
	残差	-1.7 †	-3.4 **	3.2 **	3.6 **	
合計	度数	28	66	75	22	191
	割合 (%)	14.7	34.6	39.3	12	100

** . $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$, $\chi^2 (9) = 51.46$, $p < .001$

に最も影響を与えているグループ特性は、社交性であると考えられる。しかし、その一方で、社交性因子の合成得点で、差が見られなかった中心グループと人気者グループだが、中心グループに所属していた学生の方が個人の学級内地位を「上位」と認知していた傾向が強かった。その原因として、これらの群間で差が見られたツッパリ因子の影響が考えられる。つまり、個人の学級内地位は、所属しているグループが社会的であるかというグループの特性によって大きく決定づけられるが、それに加えて、「教師に対して反抗的な態度をとる」、「先生に敬語を使わない」といった特性を持つグループに所属することで、より個人の地位を高く認知する傾向が示されたのである。

【考察】

スクールカーストの規定因

本研究では、はじめに、スクールカーストにおける上位グループと下位グループが持つ特性を測定するためのスクールカースト特性尺度を作成した。

作成したスクールカースト特性尺度は、学級リーダー因子、ツッパリ因子、社交性因子、非ヲタク因子という下位因子から構成された尺度であった。これらは、鈴木 (2012) のインタビュー

調査により得られたカーストの上位はクラスに影響を持つという特徴や下位の目立たないという特徴と一致しており、スクールカーストを規定するグループ特性は一般的に共通のものがあることが窺える。

また、本研究では、スクールカースト特性尺度の妥当性を検討するために、人気度など従来の研究で用いられてきたスクールカーストの代理指標との相関係数を算出した。すると、スクールカースト特性尺度および下位因子の合成得点は、いずれの代理指標とも概ね弱～非常に強い相関 ($.231 \leq r_s \leq .789$) を示し、十分な基準関連妥当性が認められた。

しかしその一方で、スクールカースト特性尺度及び下位因子は、高い相関が予想されたコミュニケーションスキル尺度の ENDCORES とは、ほとんど相関 ($r_s \leq .198$) を示さなかった。このことは、スクールカーストの決定要因は、個人のコミュニケーションスキルであるとする従来の考えに反していた。つまり、スクールカーストの最大の決定要因はグループの特性、すなわち、所属しているグループがどのようなグループであるかということを示唆する結果となったのである。

にもかかわらず、なぜ従来のスクールカースト研究の多くでは、その決定要因としてコミュニケーションスキルが考えられてきたのであろうか。この点を考察するにあたって、スクールカースト特性尺度の基準関連妥当性を検討した Table4 の結果が参考になる。Table4 において、社交性因子は、所属していたグループの地位を測定した中心度と高い相関 ($r = .563$) を示していた。この社交性因子では、「私の所属していたグループの友人の多くは、多くの人と関わるのが好きであった。」や「私の所属していたグループは、グループ内外関わらず仲が良かった。」といった項目が高い因子負荷を示していた。これらは、所属していたグループが外集団にどれほど開かれているグループであったかというグループの開放性を問う項目であったとも解釈することができる。従来の研究で考えられてきたコミュニケーションスキルとは、個人の能力ではなく、所属していたグループの開放性を指していたと考えられるのである。つまり、コミュニケーションスキルの高い個人が地位の高いカーストに所属できるのではなく、他の集団と積極的交流を図ることができる集団であることが、地位の高いカーストとなるための決定要因であると考えられるのである。

ところで、他の下位因子のグループ特性も見て

みると、いずれの下位因子も中心度と中～非常に強い相関が見られた。よって、どの下位因子のグループ特性もスクールカーストと関連があることが示唆された。しかし、学級リーダー因子 ($r = .789$) や社交性因子 ($r = .563$) と中心度との間に見られた相関に比べると、ツッパリ因子 ($r = .308$) や非ヲタク因子 ($r = .354$) と中心度との間に見られた相関は低かった。したがって、ツッパリ因子や非ヲタク因子のグループ特性は、全ての学級集団に共通してスクールカーストを規定付ける決定要因ではないと考えられる。つまり、スクールカーストの最大の決定要因は先行研究で指摘されてきたグループのリーダー性と社交性であることが示されたのである。

しかし、ツッパリ因子や非ヲタク因子も個人の学級内地位や中心度とそれぞれ関連が見られたことから、これらのグループ特性の影響も軽視できない。たとえば、本研究の調査対象者は国立大学教育学部の学生であり、大学受験を見越した高校出身者が多かった。そのため、「教師に対して反抗的な態度をとる」、「先生に敬語を使わない」といった行動をとるグループに所属していた学生が少なかったことで、ツッパリ因子の影響が大きく見られなかったことが考えられる。よって、今後はツッパリ因子や非ヲタク因子といったグループ特性がカーストや個人の地位に影響力を持つ学校や地域があるのかも検討していく必要があるだろう。

学級における人間関係の形成過程

さて、これまで Table4 の結果からスクールカーストにおける地位の決定要因として、学級リーダー特性や社交性特性といったグループ特性が考えられるとしてきた。これらのグループ特性の中でも、学級リーダー特性は、中心度と非常に高い相関 ($r = .789$) を示しており、ヒエラルキーそのものであることが示唆されている。

しかし、その一方で、グループ特性と個人の学級内地位との関連を検討した Table5 の結果では、社交性因子において、個人の学級内地位の全ての群間で差が見られた。この結果は、他の下位因子ではみられなかったことから、個人の学級内地位と最も関連のあるグループ特性は、社交性特性であると考えられる。

では、なぜ学級リーダー特性よりも、社交性特性の方が個人の学級内地位を顕著に決定するのだろうか。学級集団における人間関係の形成過程から考察することで、その理由が見えてくる。

新しい学級に所属した生徒が最も優先すること

は、友達・仲間づくりである。クラス編成が行われ、新しい人間関係を築いていかなければならない学級集団において、最初からヒエラルキーがあるとは考えにくい。古典的な研究でも指摘されてきたが、現代の学級集団でも、はじめは相互に平等で水平的な関係が築かれていくと考えられる。

初期の学級集団での友人関係は、近接性といった物理的要因の影響が大きいと考えられる。上田 (1969) が行った調査では、「席が近い」といった物理的要因と、「似ている」といった類同性要因から友人関係を形成している生徒が多く見られた。しかし、初期の人間関係では、お互いの性格や趣味をよく知らないため、類似性などの内面的特性によって、友人関係を形成しているのではなく、物理的要因によって、友人関係を形成していると考えられる。

時間の経過に伴い、やがて生徒達は、自分とクラスメイトとの類似性と異質性を認知してくようになる。田中 (1957) や上田 (1969) の調査では、中学生が友人を選択する理由として、類似性が大きな要因であると示されてきた。したがって、クラスメイトとの類似性を認知していくことで、類似性に基づいたグループを形成していくことが考えられる。

この類似性によって結びついているグループは、物理的要因によって結びついているグループよりも、友人関係の変動が少ないと考えられる。「席が近い」などの物理的要因によって形成されている人間関係は、席替えなどの物理的要因の変化によって、変動してしまいやすい。しかし、何らかの類似性によって形成されている友人関係は、物理的要因によって形成されているわけではないので、より変動しにくい友人関係であるといえる。

このとき、どのような類似性によってグループが形成されているかが、どのスクールカーストに位置できるかという点において重要である。例えば、クラスメイトの多くが、興味を示さないマイナーな趣味という共通点によって形成されているグループであれば、その話題でグループ外のクラスメイトと交流する機会が少ない。すると結果として、そのグループは、グループ外のクラスメイトに対して、閉鎖的なグループとなることが考えられる。

一方、クラスメイトの多くと、話題を共有できるようなメジャーな趣味によって形成されているグループであれば、グループ外のクラスメイトに対してもより開放的なグループとなる。よって、

多くの人と交流することができるため、そのグループに所属している個人が周囲に与える影響力も強くなっていき、個人の学級内地位も高くなっていく。このグループに所属している個人の学級内地位が高まっていくことで、結果的に、このグループが学級内でリーダーとなることができるようになるのである。つまり、所属しているグループの開放性が個人の学級内地位に影響を与え、そのグループに所属する個人の地位が高まることで、グループの学級での勢力が高まるのである。これが、グループ間序列であり、スクールカーストであると考えられる (Figure4)。

したがって、グループの社交性や開放性によって、個人の学級内地位は決定されるため、Table5において、個人の学級内地位の全ての群間で、所属していたグループの社交性因子に差が見られたのである。

本研究の問題点と今後の課題

本研究においては、はじめにスクールカースト特性尺度を作成した。しかし、本研究で作成したスクールカースト特性尺度は、項目数が非常に多く、構成概念妥当性の検討も不十分である。したがって、この尺度をより精緻化していく必要があるといえる。

本研究での調査協力者は、国立大学教育学部の学生であったことから、学級集団における立場や学校現場の捉え方に大きな偏りがあったと考えられる。したがって、本研究で決定したスクールカーストに影響を与えるグループ特性も、多くの学校現場に共通しているものかの検討が不十分である。そのため、より様々な特徴をもった人物により構成されている集団に対して、調査を行っていくことで、スクールカーストを決定づけるグループの特性についてもより検討していく必要がある。

また、本研究では、個人の地位を決定する要因として、所属しているグループが社交的で開放的であることが重要であることが示された。しかし、その一方で、所属していたグループの特徴と個人の学級内地位との関連を検討した Table7において、中心群と人気者群の間で、社交性因子に差が見られなかったにもかかわらず、個人の学級内地位を「上位」とする傾向の強さに違いが見られた。中心群と人気者群の差異は、中心群の方がツッパリ因子の合成得点が高かったことから、このような差異が生じていた原因として、ツッパリ因子の影響が考えられる。つまり、学級集団において、教師に反抗的な態度をとったり、先生に敬

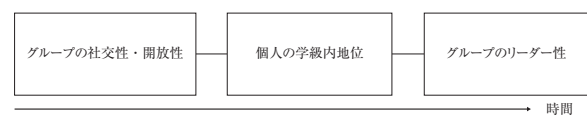


Figure4 スクールカーストの形成過程

語をつかわなかったりするようなツッパリ行動をすることは、一種の勢力を得ることができる行為である可能性が示唆されているのである。しかし、本研究では、この点について、十分な検討を行っていない。したがって、今後は、学級集団におけるツッパリ行動とスクールカーストとの関連についても検討していく必要がある。

本研究では、学級内におけるグループ間の序列 (スクールカースト) と個人間の序列を区別すべきとの主張に基づき、これらの関連について検討を行った。すると、個人の学級内地位が、所属しているグループの特性から決定されていることが示唆された。つまり、学級集団における階層は、個人の特性によって規定されているわけではなく、所属しているグループの特性によって規定されている可能性が示されたのである。この点は従来の研究では指摘されてこなかった点であり、本研究の意義といえるだろう。

【引用文献】

- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 本田由紀 (2011). 若者の気分 学校の「空気」 岩波書店
- 宮台真司 (1994). 制服少女たちの選択 講談社
- 水野君平・加藤弘道・川田学 (2015). 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係: 教室内における個人の地位と集団の地位という視点から 子ども発達臨床研究, 7, 13-22.
- 森口朗 (2007). いじめの構造 新潮社
- 森田洋司・清水賢二 (1986). いじめ—教室の病い— 金子書房
- 森田洋司・清水賢二 (1994). 新訂版いじめ 金子書房
- 森田洋司 (2010). いじめとは何か—教室の問題、社会の問題— 中公新書
- 長島貞夫 (1967). 児童社会心理学—性格の社会的形成— 牧書店
- 鈴木翔 (2012). 教室内カースト 光文社
- 田中熊次郎 (1957). 児童集団心理学 明治図書

田崎敏昭 (1982). 学級集団における勢力地位と勢力資源, 心理学研究, **53**, 165-168.

上田敏見 (1969). 学級における社会的受容に関する発達心理学的研究 (Ⅳ) —対人結合要因に関する発達の分析— 奈良教育大学紀要, **15**, 133-145.

上田敏見 (1979). 好かれる子・嫌われる子—

性格心理学的考察— 児童心理, **33**, 1932-1940.

上間陽子 (2002). 現代女子高生のアイデンティティ形成 教育學研究, **69**, 367-378.

和田秀樹 (2013). スクールカーストの闇—なぜ若者は便所飯をするのか— 祥伝社

